

胡麻地域振興会理事長 芦田 昌徳さん

南丹市日吉町の胡麻地域の活性化に取り組むNPO法人(特定非営利活動法人)「胡麻地域振興会」が発足して二年。口丹波各地で農山村の過疎化が進行する中、住民による地域のための店舗「胡麻屋」を開店させ、積極的な村おこしに取り組んでいる。芦田昌徳理事長(モロ)に、取り組みの内容や、集落の活性化について聞いた。

(辻智也)

—NPO法人胡麻地域振興会とは。

「発足は二〇〇五年五月。当時、町村合併が論議されており『合併後は園部が行政の中心地になるだろう、何もしなければ過疎の町になってしまう』という危機感を、住民が共有していた。そこで、JR胡麻駅横の空き施設だったコミュニティセンターを活用し、地

域活性化につなげるたい。人件費などの運営



あした・まじのり 園部町出身。全農職員を経て、67年から02年まで特定局の胡麻郵便局長を務め、05年から現職。南丹市日吉町胡麻。

しているが、何も食べなくても雑談を楽しんだり、住民グループの話合いなどに使っても構わないようにしており、触れ合いの場を生み出している」

住民が気軽に 出店

め、〇六年四月に、住民費は、出店者からの手数料で賄うが『手作りの野菜や雑貨をちよつと売り出す』という人を閉め出らお年寄りまでが気軽に集える場として、これまでになかった地域生活の拠点になりつつある。また、顔の見える

『胡麻屋』をオープンさせた。ほかに、草刈りなどの環境美化活動、盆踊りイベントなどの手助けをしている。『胡麻屋』の具体的な取り組みは、

「胡麻地域の事業所や商店、住民が、農産物や加工品、手作りの雑貨などを持ち寄り、販売して

「軽食コーナーも併設している」

エコーノ旬話

—住民による集落の活性化のために重要なことは。

「胡麻地域振興会は、胡麻、上胡麻、畑郷という地区の住民で構成しているが、普段から付き合いがあり、顔の見える範囲であるからこそ、活動が円滑に進む。『地域の人たちのために』という意識を共有できないと、足並みも乱れる」

「集落の活性化というと、ついつい観光客など外からの客をあてにしてしまいが、いかに足元を見据えた活動ができるかが大事。『もつける』『観光客呼び込む』という発想ではなく、自分たちの地域をみんなで作るという取り組み自体に、

いかにやる気を持ってもらえるかが鍵になるのでは

安心して買える交流の場